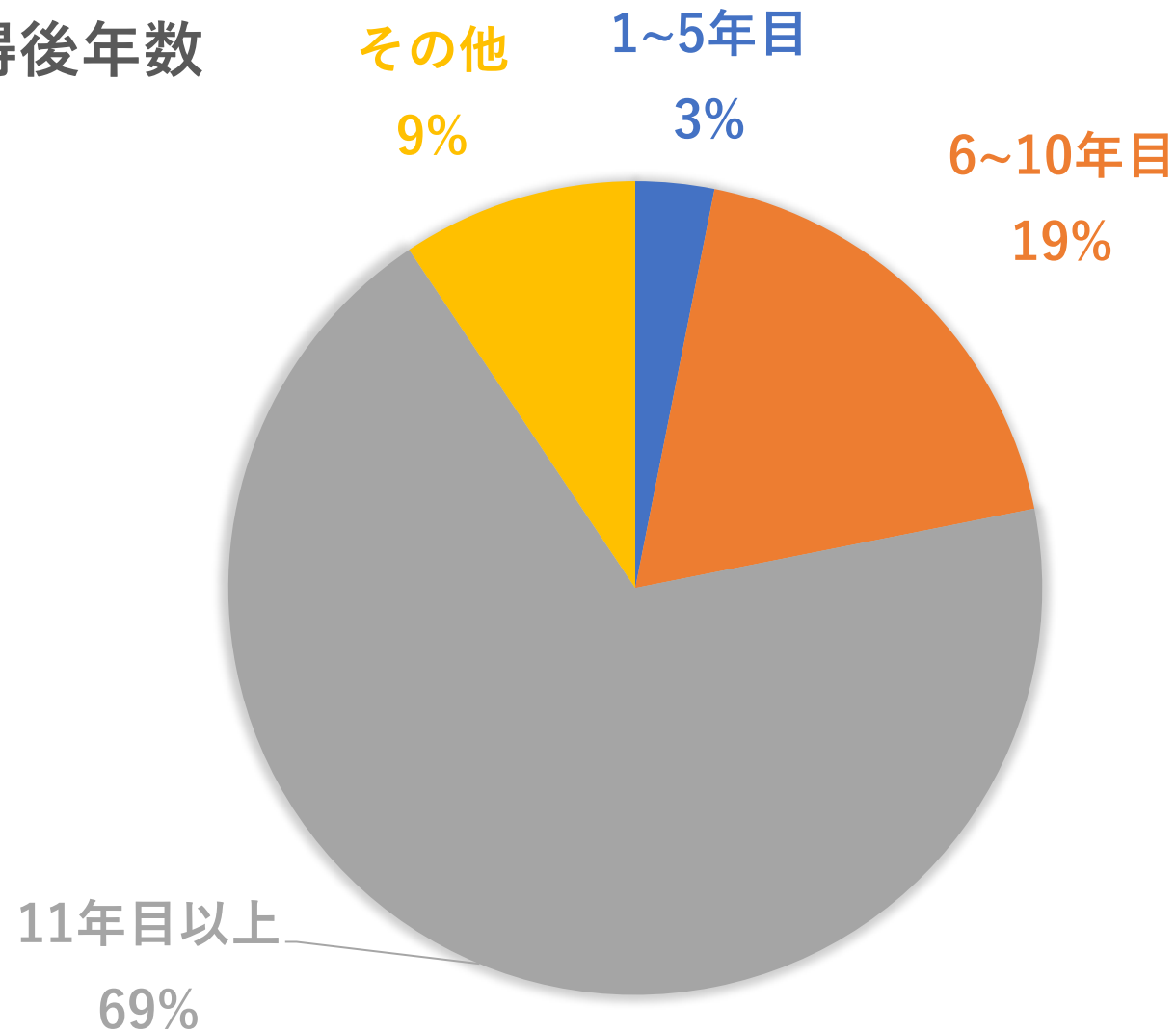


新生児集中ケア認定看護師会 勉強会2022

事前アンケート（心理士）集計結果

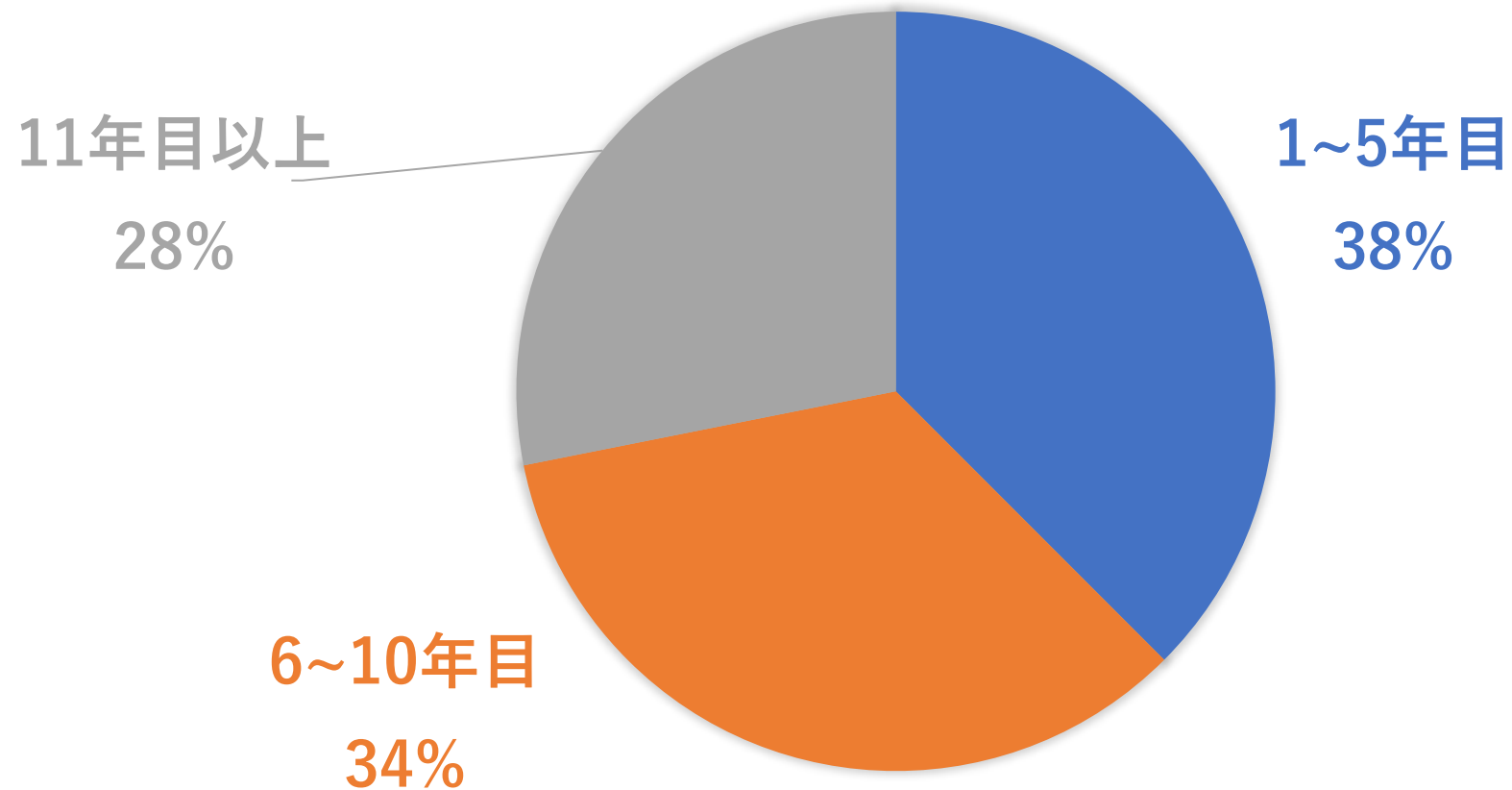
1) 臨床心理士を取得してどれくらいになりますか？

臨床心理士取得後年数

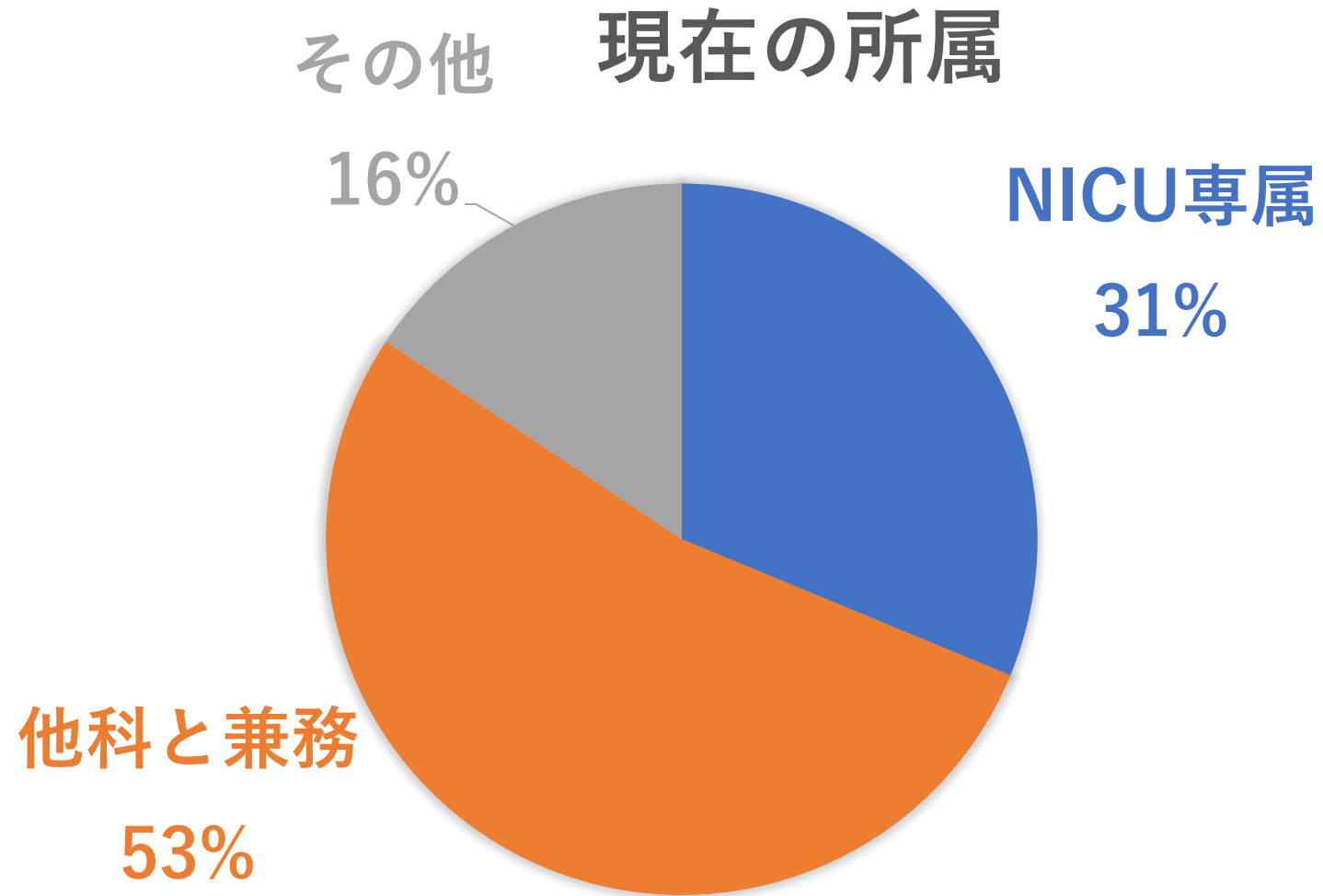


2) 周産期領域に関与してどのくらいになりますか？

周産期領域とのかかわり



3) 現在の所属を教えてください。

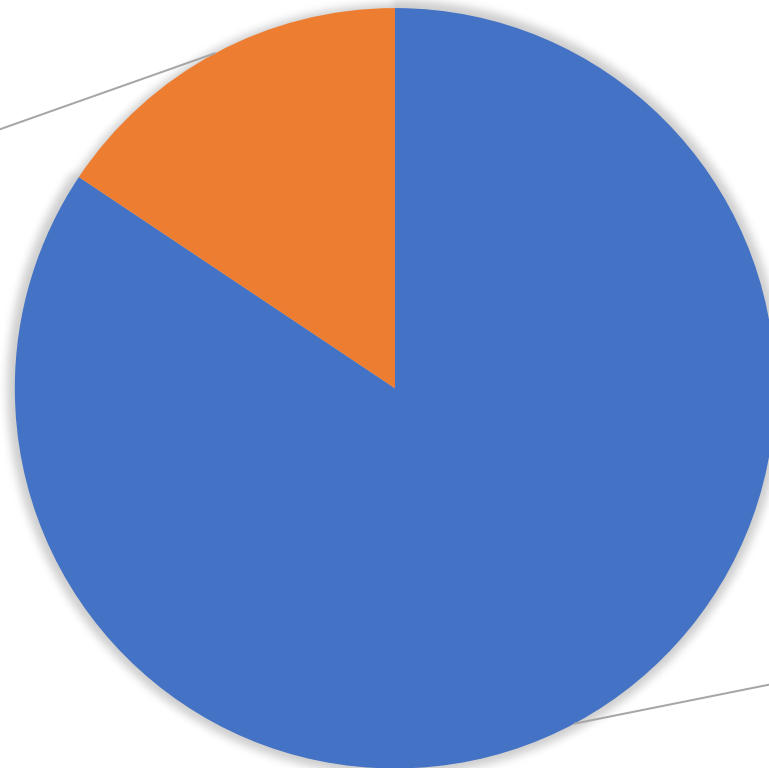


4) 妊産婦COVID-19患者を受け入れていますか？

妊産婦COVID-19患者の受け入れ

受け入れていない

16%



受け入れている

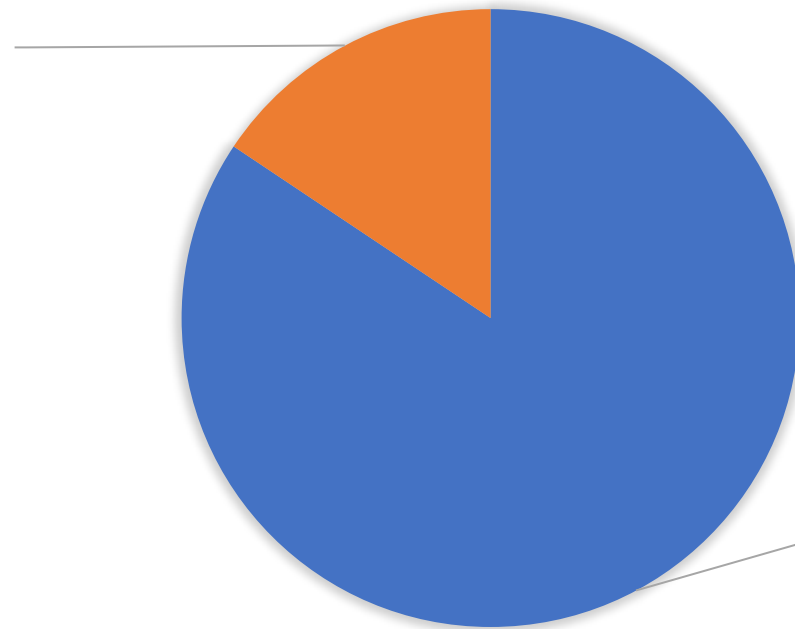
84%

5) NICUでCOVID-19陽性母体からの出生児を受け入れていますか？

COVID-19陽性母体からの 出生児の受け入れ

受け入れていない

16%

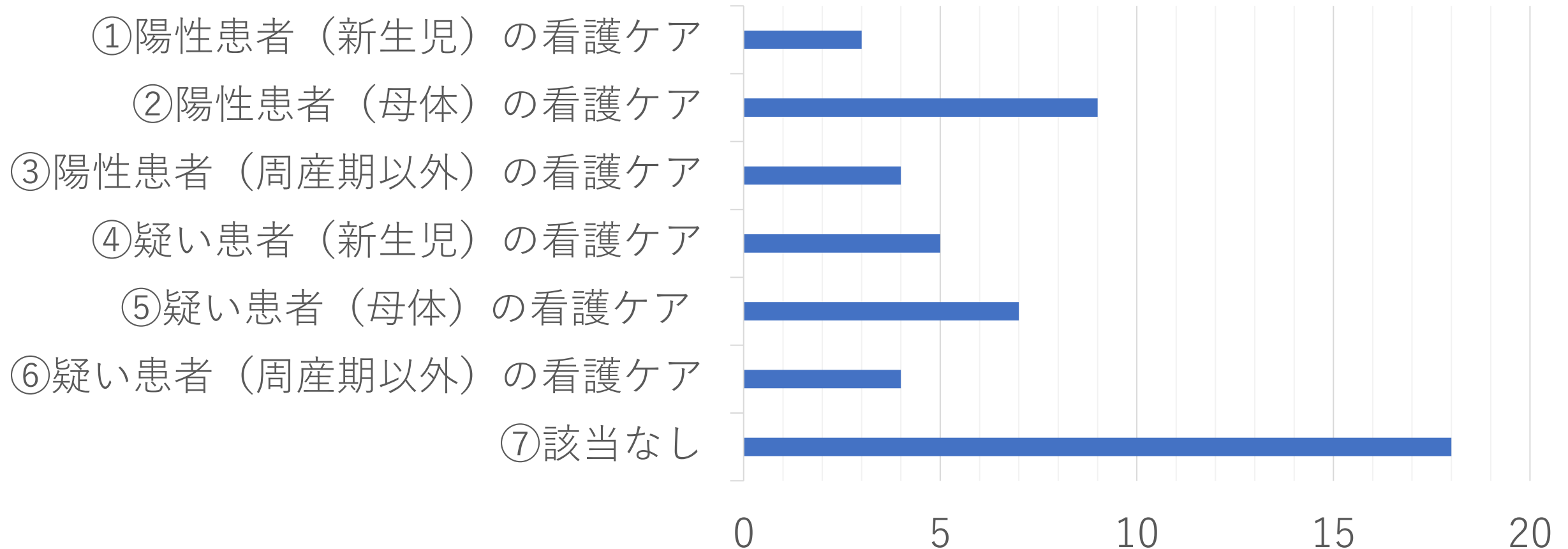


受け入れている

84%

6) COVID-19に関連してあなたが行った心理的ケアに当てはまるものを次の項目から選択してください。
(複数選択可)

心理的ケア (複数回答)



7) COVID-19流行により、子どもに関する変化や影響がありましたか？

子どもに関する影響

どちらともいえない

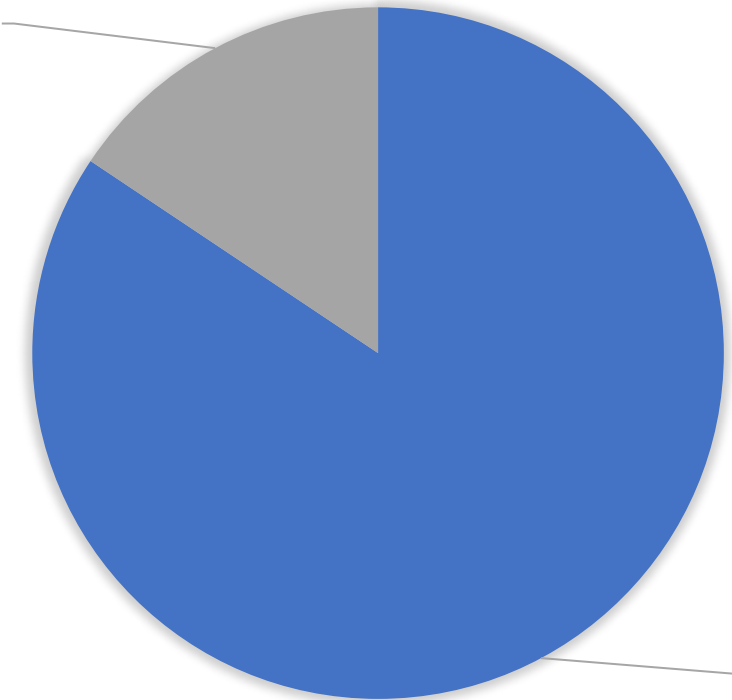
16%

なし

0%

あり

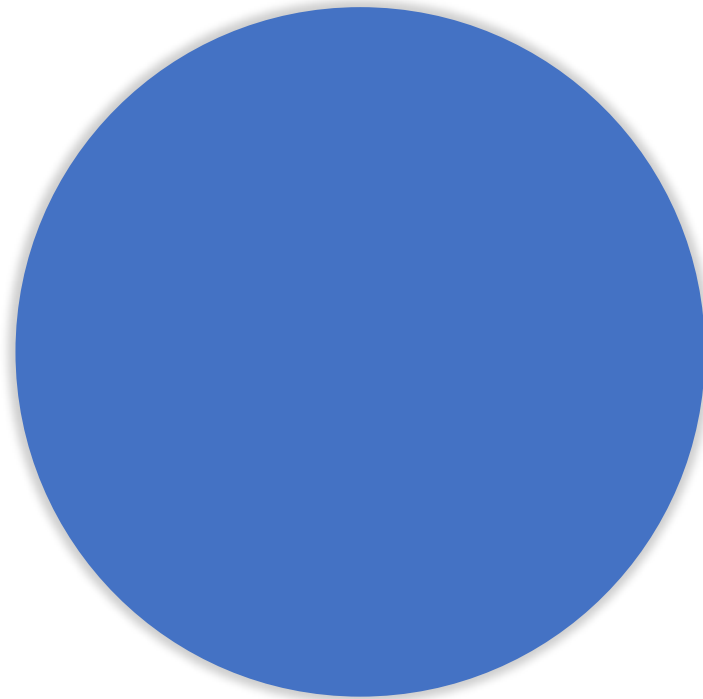
84%



8) COVID-19流行により、家族に関する変化や影響がありましたか？

家族に関する影響

あり
100%



どちらともいえない
0%

なし
0%

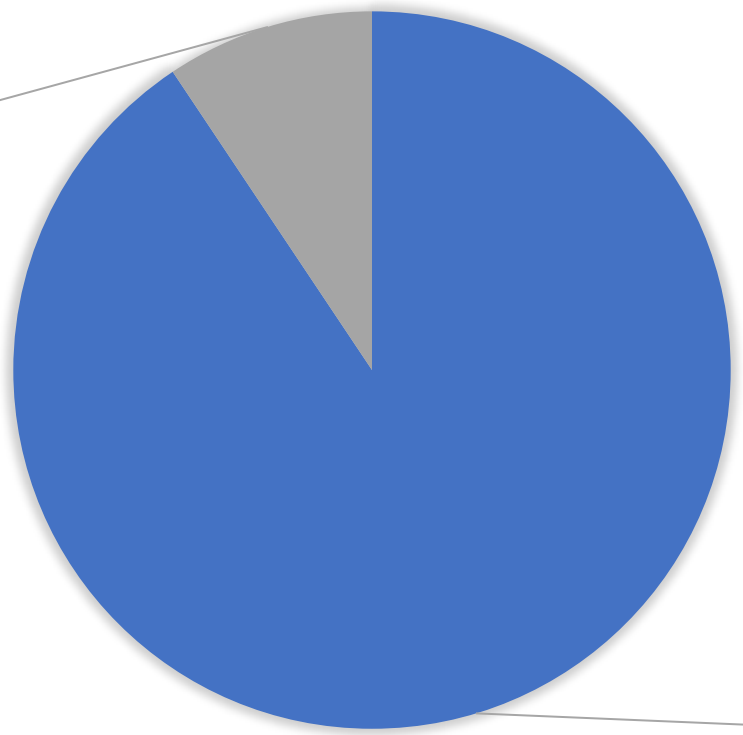
9) COVID-19流行により、NICUでの全ての心理士に関する変化や影響がありましたか？

心理士への影響

どちらともいえない
9%

なし
0%

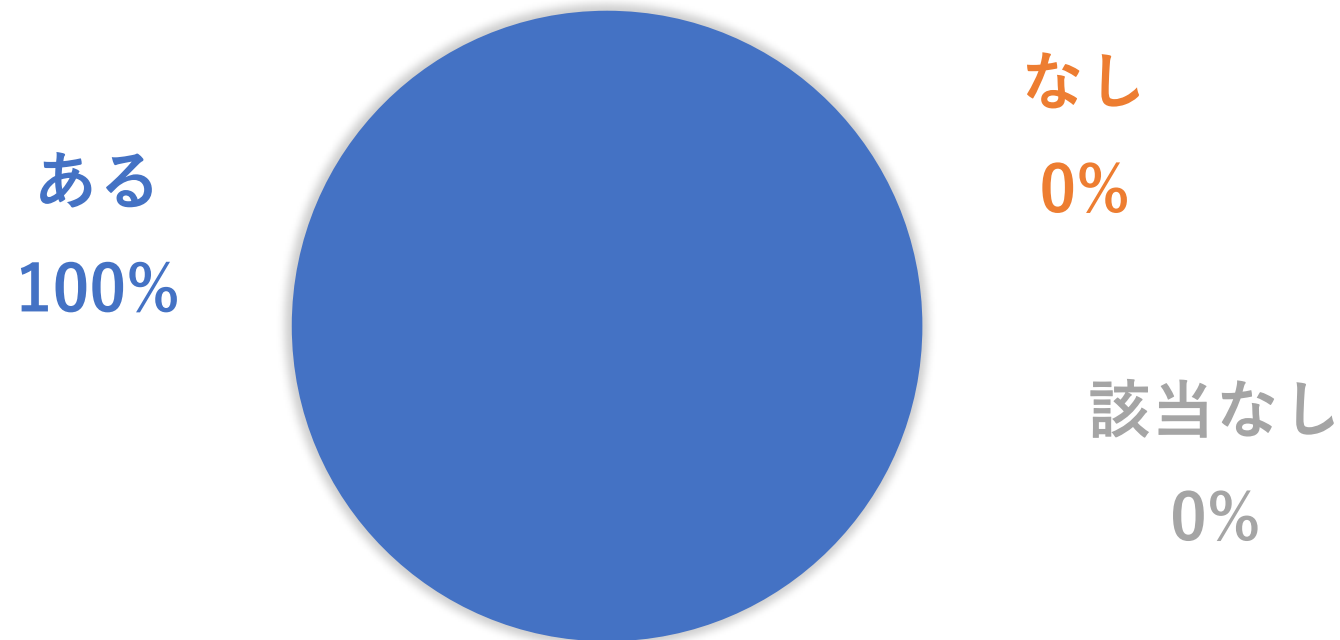
あり
91%



1 1) 現時点で日常的にNICUと心理士の介入はありますか？

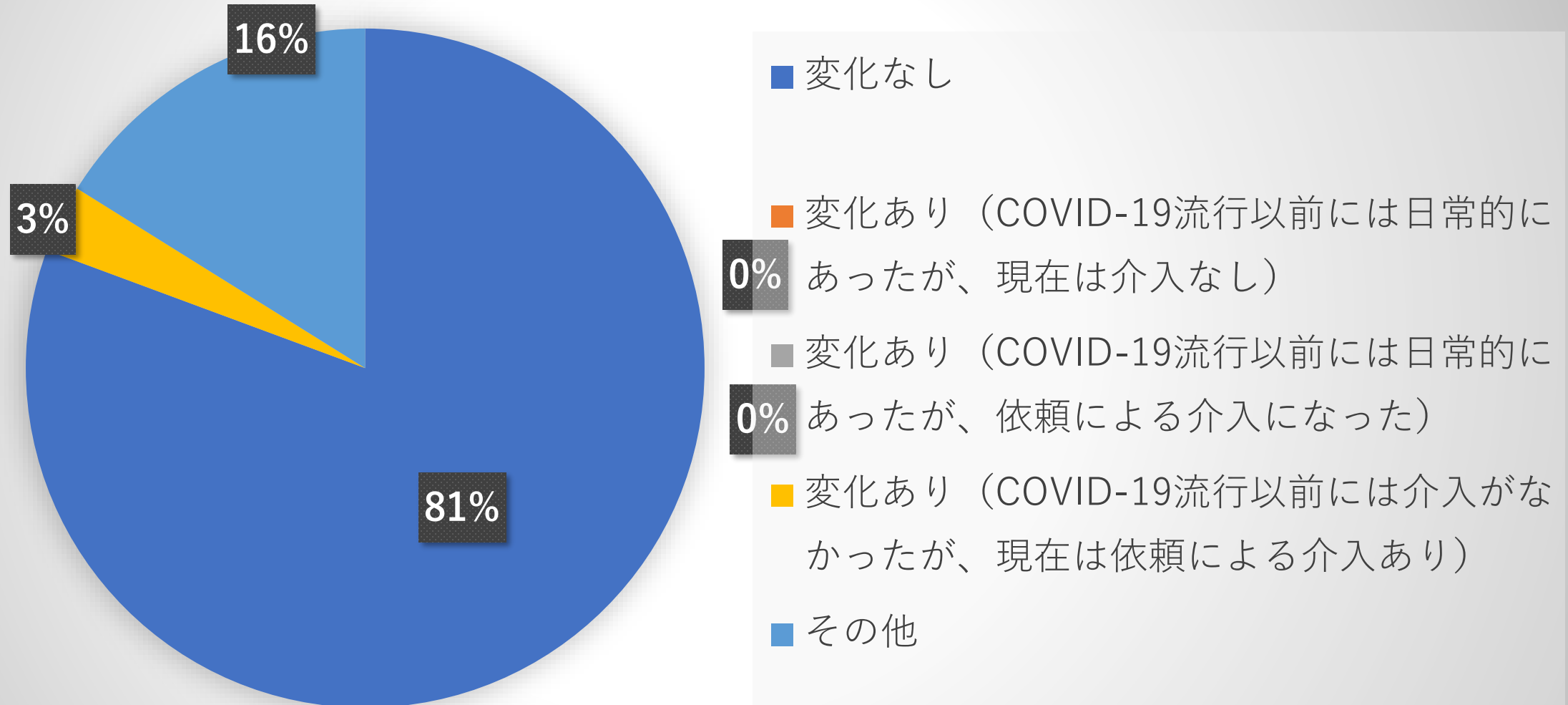
※日常的とは、コンサルテーション等の依頼なしでの介入です。

心理士の日常的な介入の有無



12) 11) についてCOVID-19 流行により変化
はありましたか？

COVID-19前後での心理士介入の変化



12) その他の意見

- COVIDになって現在の職場に入職したため、それ以前のNICUとのやりとりがどうだったか、比較ができません。
- 常勤で毎日NICUに入っていたため、心理士が居るのが普通になっているので、特に変化はない。ただ、面会時間の制限が厳しくなったので、病棟でなかなか家族とタイムリーに会えないため、スタッフに母親が来たら教えてもらうように依頼する機会が増えた。
- NICU,GCUでの日常的な介入は継続しているが、面会禁止のため家族に会う回数が減った。産科の妊産婦への訪室が介入・依頼ともになくなった。
- 心理士が訪室する時間等を短時間に抑えるように心がけるようになった
- 日常的に介入していることに変わりはないが、濃厚接触の定義にかからないようにするため赤ちゃんとの関わり方やIC同席などに制限が作られ変化があった。

10) COVID-19流行による変化や影響についてあなた自身のお考えを自由にお書きください。

- * 家族と赤ちゃんの愛着関係が不十分なまま隊員となることが増えたように思う。 * 退院後、家族の育児手技の不十分さが問題になることが多くなった。
- COVIDによる面会制限によって親子が一緒に過ごす時間がかなり制限されたり祖父母面会ができないことは、赤ちゃんと家族の関係性に大きな影響を及ぼしていると感じている。制限下でも親子関係を深めていけるケースもあるが、状況に応じて個別に制限緩和を行うケースもある。しかし緩和自体にも限界がある。・面会制限に関しては、切迫早産などで入院されている妊婦さんも夫や家族に会えず、治療などに関して意思決定をしなければならない場合に電話だけではうまく話せないことや、夫も健診などに同席できていないため赤ちゃんのことを実感をもって捉えられないなどの影響がある。・感染症病棟への応援や感染対策、陽性妊婦さんやその赤ちゃんのための病床確保などによる医療スタッフの疲弊。

- これまでのような子どもと家族目線のサポートよりも、まずはリスク回避や安全管理が重視され、コロナ禍も3年目になるとそれに慣れてしまっているスタッフが多い。以前のように戻るにはかなり時間とエネルギーが必要と感じる。
 - ・ 面会制限下で出生した子どもの発達フォローアップで再会するようになって感じるのは、しっかり記憶に残っていない親子がいるということ。改めて、その親子がNICUをどう体験されたのか、出合いをしっかりと支えられていたかを考えさせられている。
- 子どもが家族以外の大人や子ども同士の関わりが減ってしまい、コミュニケーションや社会性を育む機会が減っている印象があります。またスタッフも家族との関わりが減り、いないのが当たり前になっているためファミリーセンタードケアの意識が低下していないか危惧しています。
- 1人の人間としての自分と病院に勤める人間としての自分との立場に、周囲との関わり方について戸惑ったことがあった。

- 2020.4～2022.3の間、NICUを離れて乳幼児の発達支援のお仕事をしていました。コロナ禍のNICUについては、2022.4月以降の関わりとなりますが、乳幼児の親子への影響も伝えられたらと思います。
- NICU/GCUに入る保護者（私服）が稀になり、心理士自身も服装について改善を求められた。心理士の立場役割について考えさせられた。面会制限のために医療スタッフと保護者の関係が築きにくくなり、お互い遠慮がちになったように思う。希薄になった分、退院後の外来フォローにも影響している印象もある（未来院など）。
- 家族に会う、家族で一緒に過ごす、という普通のこと、自由に自分の意思で決めることができない状況を経験すると、それができるようになったときに普通のことなんて愛おしい大切な時間なのかと体験されている方が多いと感じています。その時に想いを話すこと、その時のことを振り返る時間を持つことで家族の力を信頼する時間になったり、反対のことも起きていたり。また、真面目な親御さんのお子さんほど経験不足で、親子で大変な時間を過ごされているようにも感じています。

- 両親や祖父母、きょうだいに会える時間が減ったり会えなくなったりしたことで家族で赤ちゃんのことを知ること、状態を共有することに関して難しさが出ていた面もあったように思う・自由に長い時間面会に来れない、濃厚接触などになった場合面会禁止などストレスに感じるご家族もいた。一方で面会が負担になっている家族にとっては気持ち的に楽な面もあったように感じられた。・コロナ禍で面会に来るために感染しないよう常に気を付けて生活しなければならない負荷も少なくないように感じた（特に入院が長期になる方）・心理士としては、家族の面会が減り、短時間となったことで声かけのタイミングなど難しいと感じる場面、自分自身の存在意義について考えることが多くなった。一方で、赤ちゃんにしっかり目を向ける機会にもなり、赤ちゃんとを知ること、関係性を作っていくことの難しさも感じた。
- 家族面会の制限により、母の心理面が不安定になりやすかったり、母の子への分離不安、また、新生児のやりとりの反応の弱さがややみられました。

- 赤ちゃんの個性をわからないまま退院して赤ちゃんの泣きなどに参ってしまった家族があった。1歳半のフォローアップで「まったく外で遊ばせたことがない」という親子が増えた。
- 面会禁止・面会制限など、以前よりも直接対面の機会が少なくなってしまった一方で、より貴重な機会であると捉えて、医療者側も、大切に扱うようになった印象も受けます
- 面会制限、マスク常用、接触の制限、面会方法の工夫(オンライン、スマホの活用)、ご家族やスタッフの疲弊やストレスなど。マイナス面も多いが、この状況下でできることは何か？と柔軟に考えたり、今まで当たり前と思っていたことの要不要を見直す機会にもなって、赤ちゃんと家族のために、働くスタッフのためにプラスな面もある。
- 面会制限が厳しくなったことにより、コロナ禍以前よりも愛着形成が難しくなっていると感じる。
- 流行の状況により、面会制限の有無が変化しています。面会制限により、本来自然で当たり前のふれあいができないことによる影響は大きいと感じます。